

## 第2章 調査結果の概要

### 1. 「御五神島・無人島体験事業」について

#### (1) 参加理由

「自分で行きたいと思った」参加者は6割以上、「親から勧められた」参加者は約2割

御五神島・無人島体験事業の参加者（以下、「過年度参加者」という。）に、御五神島・無人島体験事業（以下、「無人島体験事業」という。）に参加した理由を尋ねたところ、最も多かった理由は「自分で行きたいと思ったから」（65.8%）で、次いで「親に勧められたから」（20.3%）、「友達に誘われたから」（4.0%）等であった（図 1.1.）。

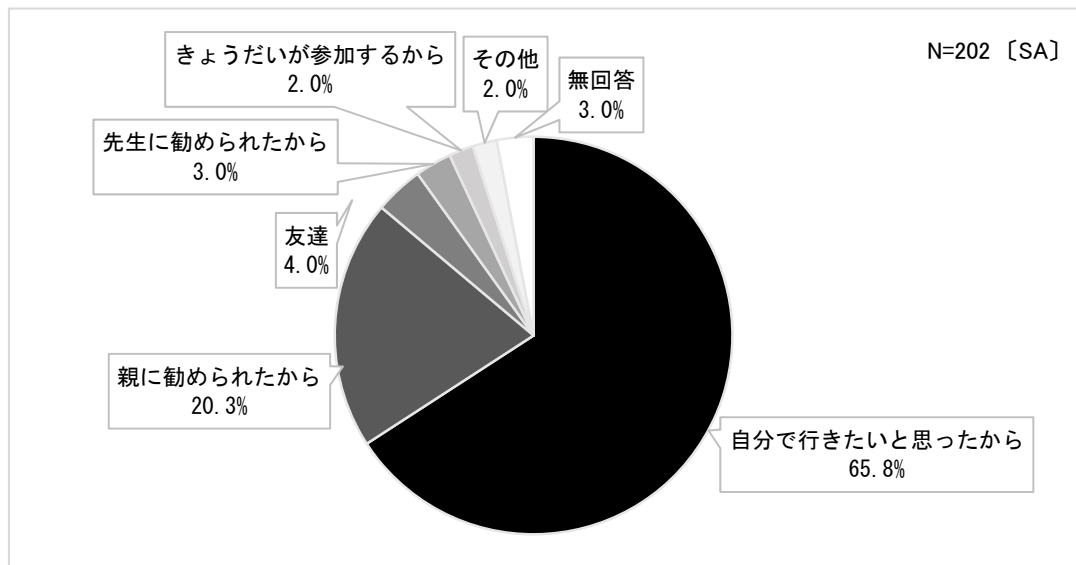


図 1.1. 参加した理由（参加者調査）

過年度参加者の保護者に、子供を無人島体験事業に参加させた理由を尋ねたところ、最も多かった理由は「子供が行きたいと言ったから」（62.6%）と参加者調査と同様の結果がみられ、次いで「親が行かせたいと思ったから」（31.6%）、「知り合いの人に勧められたから」（2.9%）等であった（図 1.2.）。

そこで、「親が行かせたいと思ったから」と回答した保護者に具体的な理由を尋ねたところ、無人島体験での子供の成長や学びを期待し、本事業に参加させていることがうかがえた（表 1.1.）。

表 1.1. 親が行かせたいと思った理由（自由記述）

- ・学校でいじめを受けており、過去を知らない新しい自分として知り合いを作ってほしかったから。（父）
- ・情報や物質など豊富な中で生活をしているため、不便さから人とのつながり、自分にできること、自然の恵み、怖さを学んでほしかったから。（母）
- ・ゲームやインターネットが普及する中、バーチャルでの遊びが主流になり、与えられる情報ばかりではなく、自分から考え、行動し、人との協力や達成感を体験として味わってほしいと思ったから。（母）
- ・以前、NHKのドキュメンタリー番組で御五神島・無人島体験事業のことを見て、とても感動して涙が出た。不自由で過酷な環境の中で、仲間と協力しながら子供たちが成長して顔つきが変わっていく姿がとても印象的で、ぜひ息子にも体験させたいと思っていたから。（母）

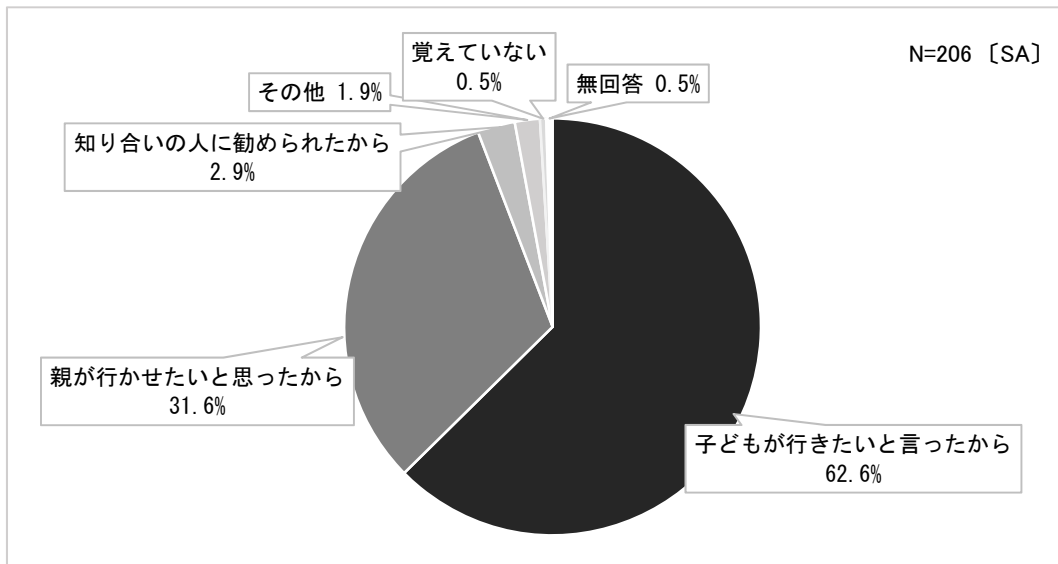


図 1.2. 参加させた理由（保護者調査）

(2) 楽しかった活動・教育的な効果が高い活動

「自給自足的な生活体験」「食事づくり」は、多くの参加者が「楽しかった」と感じているだけでなく、多くのスタッフが「教育的な効果が高い活動」と思っている。

過年度参加者に、無人島体験事業の中で楽しかった活動について尋ねたところ、最も回答が多かった活動は「自給自足的な生活体験」（70.8%）で、次いで「食事づくり」（64.4%）、「シュノーケリング」（52.0%）等であった（図 1.3.）。

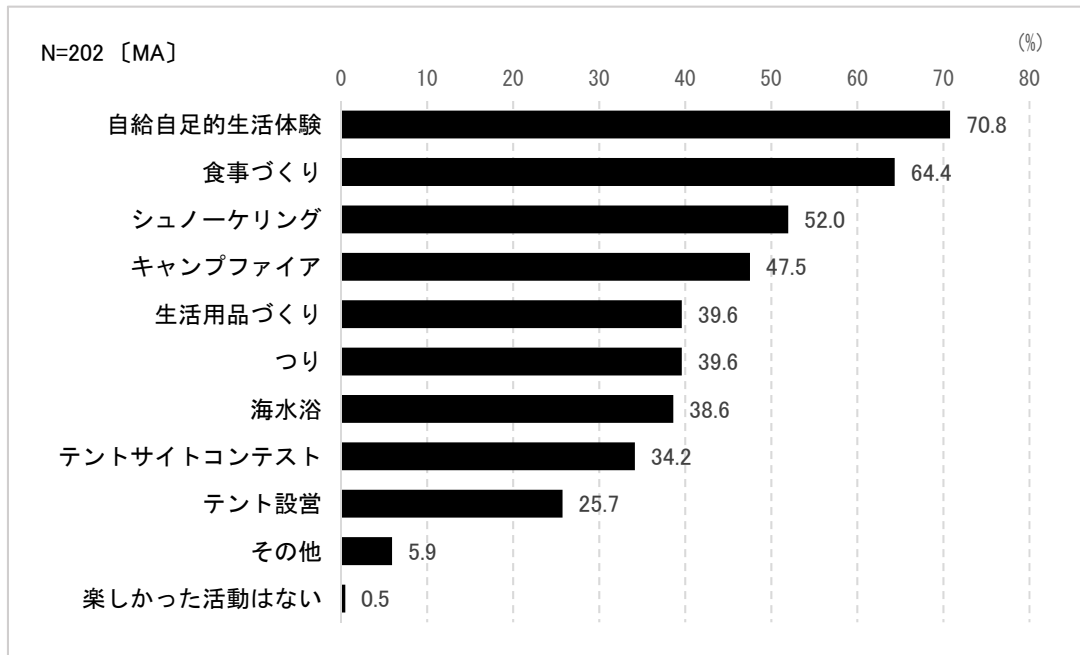


図 1.3. 楽しかった活動（参加者調査）

スタッフに無人島体験事業の中で教育的な効果が高いと思う活動について尋ねたところ、最も回答が多かった活動は「食事づくり」(93.7%)で、次いで「自給自足的な生活体験」(78.9%)、「生活用品づくり」(70.4%)等であった(図1.4.)。

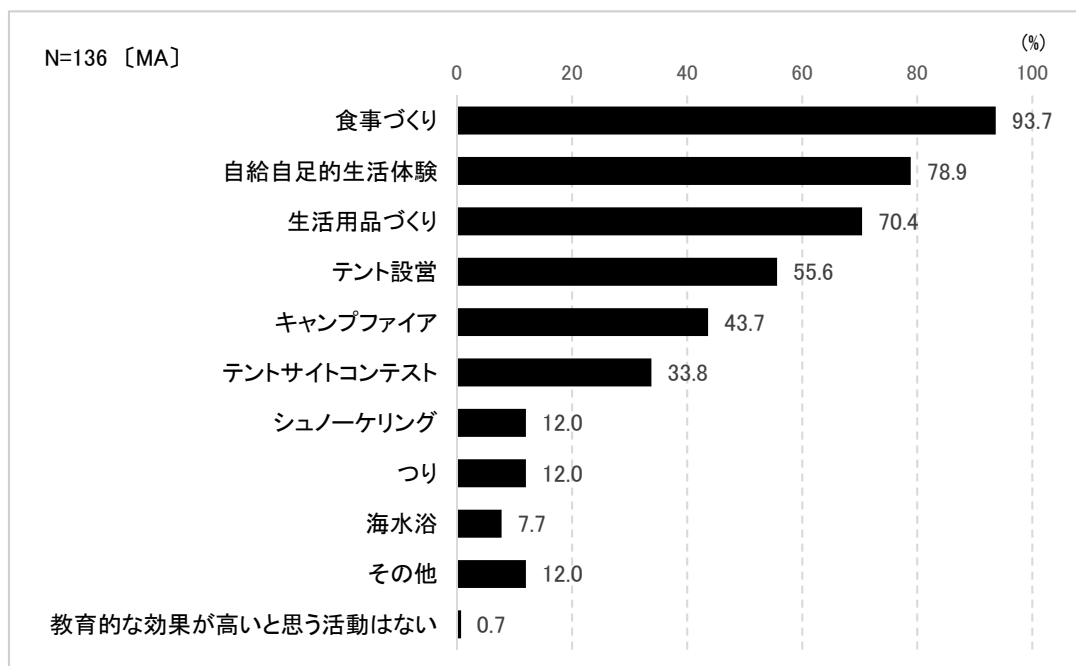


図 1.4. 教育的な効果が高いと思う活動 (スタッフ調査)

### (3) 今でも思い出に残っている出来事

参加者・スタッフの約9割、保護者の8割強が「今でも思い出に残っている出来事がある」と回答

過年度参加者とその保護者、スタッフそれぞれに、無人島体験事業に参加した(させた)ことで今でも思い出に残っている出来事があるか尋ねたところ、「ある」(「たくさんある」+「少しある」)と回答した参加者は88.6%、保護者は83.0%、スタッフは95.1%であった(図1.5.~図1.7.)。

そこで、「ある」と回答した人に、思い出に残っている出来事の内容を尋ねたところ、表1.2.~1.4.のとおりであった。

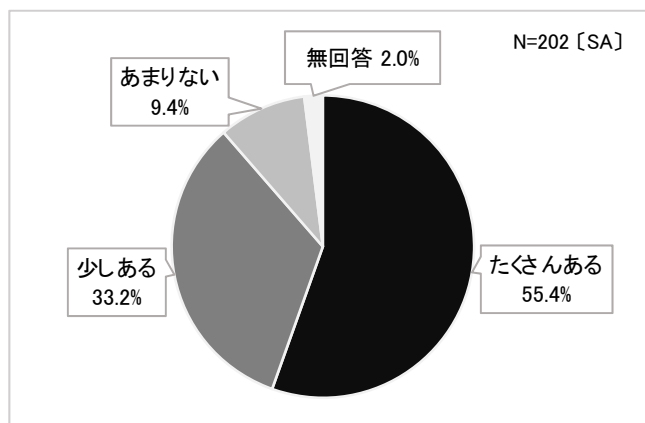


図 1.5. 思い出に残っている出来事 (参加者調査)

表 1.2. 一番思い出に残っている出来事 (自由記述)

- ・台風が近づいたときで、薪が濡れてダメになったり、テントが倒れたりで大変だったが、他の班と物々交換したり、バイト(仲間のために行う奉仕活動)をしてマッチをもらったりして何とかしのいだこと。(17歳、女性)
- ・班の中で仲の悪い人がいたが、無人島を離れる日が近づいたときに、お互いに自分の悪かったことを言い合って仲直りができたこと。(19歳、男性)

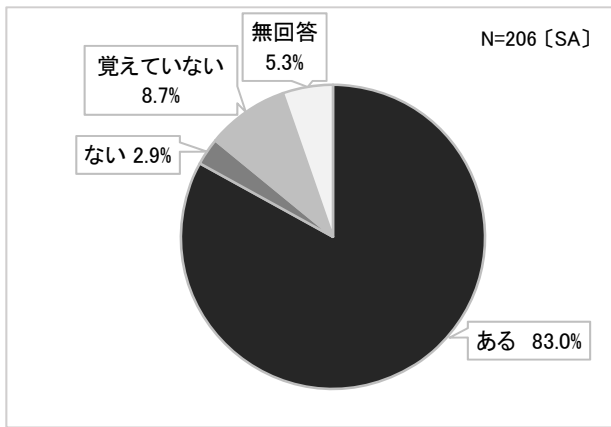


図 1.6. 思い出に残っている出来事 (保護者調査)

表 1.3. 思い出に残っている出来事 (自由記述)

- ・班の子供と初日は全く話すらできていない様子だったのが、帰ってきたときはまるで昔からの友人だったように班員全員と楽しそうに話していたのが印象的だった。(母)
- ・無人島から帰ってきて、とにかく電気に感動していた。夜が暗くないこと、冷蔵庫があるから腐らないなどに驚き、それが当たり前だと思って生活していたことに感謝していた。(母)

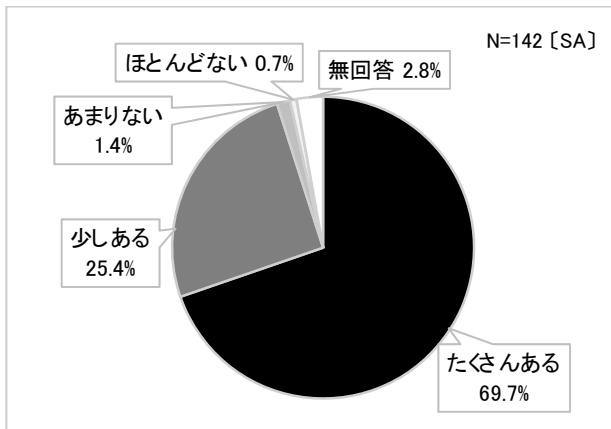


図 1.7. 思い出に残っている出来事 (スタッフ調査)

表 1.4. 思い出に残っている出来事 (自由記述)

- ・なかなか班になじめず、プライドの高かった男子が、最終日前の夕方、夕日を見ながら「ぼくは変わったと思う。ここに来てよかった。」と涙を流して伝えてくれたこと。(26歳、女性・教諭)
- ・最初は非協力的で、自己中心的な傾向があった子供が、活動をとおして、仲間と協力することの大切さに気づき、最後はグループのリーダー的な行動ができるようになったこと。(43歳、男性・教諭)

#### (4) 事業で出会った友達との交流

事業で出会った友達と交流したことがある参加者は6割弱で、その方法は「手紙」が最も多い。

過年度参加者に、無人島体験事業で出会った友達と今でも交流を続けているか尋ねたところ、「続けている」と回答した参加者は17.3%、「以前はしていたが、今はしていない」と回答した参加者は38.6%となっており、6割弱の参加者が事業で出会った友達と交流をした経験があると回答した(図1.8)。

そこで、どのように交流をしたのか尋ねたところ、「手紙」(60.2%)が最も多く、次いで「直接会った」(25.7%)、「SNS」(23.9%)等となっていた。

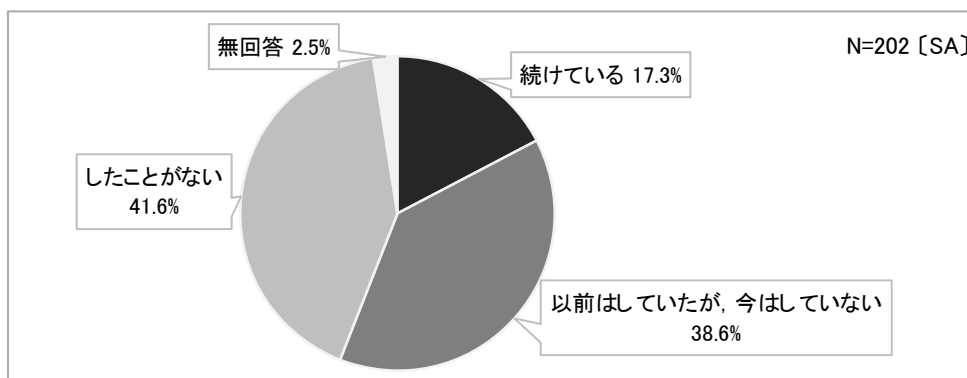


図 1.8. 事業で出会った参加者との交流 (参加者調査)

#### (5) ボランティアスタッフとしての参加希望

7割以上の参加者が「ボランティアスタッフとして参加してみたい」と思っている。

過年度参加者に、無人島体験事業にボランティアスタッフとして参加してみたいと思うか尋ねたところ、「とても思う」と回答した参加者は30.7%、「少し思う」と回答した参加者は41.1%で、7割以上の参加者がボランティアスタッフとして参加してみたいと思っていると回答した（図1.9.）。

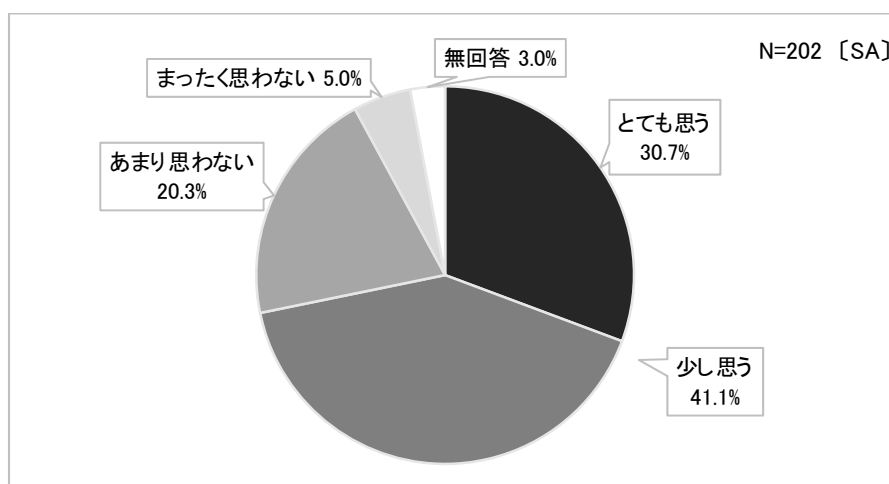


図 1.9. ボランティアスタッフとしての参加希望（参加者調査）

#### (6) 無人島体験事業の継続希望

9割以上の保護者が「無人島体験事業」を継続してほしいと思っており、9割以上の参加者が「将来、自分の子供を無人島体験事業に参加させたい」と思っている。

過年度参加者の保護者に、無人島体験事業の継続について尋ねたところ、「絶対に続けてほしい」と回答した保護者は44.7%、「可能であれば続けてほしい」と回答した保護者は50.0%で、9割以上の保護者が無人島体験事業を続けてほしいと回答した（図1.10.）。

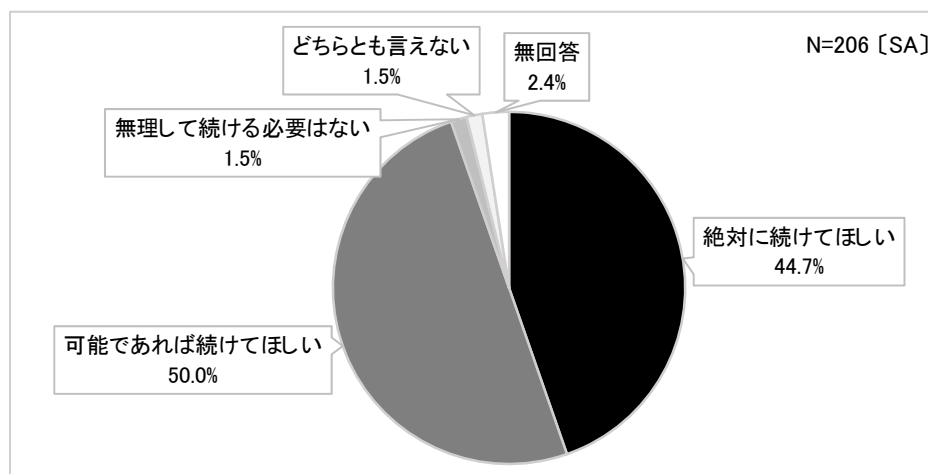


図 1.10. 事業の継続希望（保護者調査）

また、過年度参加者に、将来、自分の子供を無人島体験事業に参加させたいと思うか尋ねたところ、「とても思う」と回答した参加者が 47.5%、「少し思う」と回答した参加者が 44.1%で、9 割以上の参加者が、将来自分の子供を無人島体験事業に参加させたいと思っていると回答した(図 1.11.)。

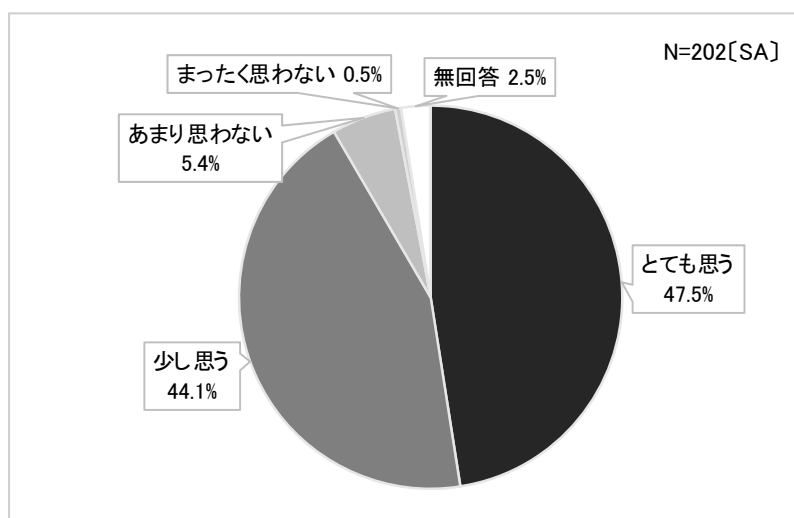


図 1.11. 自分の子供を無人島体験事業に参加させたいか (参加者調査)

#### (7) 今後も継続してほしいプログラムや新たに取り組んでみたいと思うプログラム

今後も継続してほしいプログラムは「自給自足的な生活体験」

過年度参加者に、今後も無人島体験事業で継続してほしいプログラムや新たに取り組んでみたいと思うプログラムについて自由記述で尋ねたところ、自給自足や野外生活体験に関する記述が多くみられた(表 1.5.)。

表 1.5. 今後も継続してほしいプログラムや新たに取り組んでみたいと思うプログラム(自由記述)

- ・自給自足生活は今後も継続してほしいと思います。また、自分で食器、箸など作るのも続けてほしいと思います。「無人島でのみんなで花火」など新たに取り組んでみたいと思います。(20 歳、男性)
- ・バッタやくもをから揚げにして食べるというプログラムを継続してほしい。(14 歳、男性)
- ・シュノーケリングや海水浴はぜひ続けてほしい。海にいたウニをとって帰ってみんなで食べたり、海を泳いでいたらタコを見つけてみんなで大騒ぎしたのが、とても楽しく、今でもとても印象に残っている。(19 歳、女性)
- ・テントサイトコンテストは、やる気も出て、快適な生活にするためにはみんなで協力もできたのでよかった。(20 歳、女性)
- ・木のようなものにメッセージを書いて家に送る活動が楽しかったです。家に帰ってから家族と話をする時の話のタネになりました。(21 歳、女性)

## 2. 「御五神島・無人島体験事業」の教育効果とその後の影響

### (1) 「体験の力」からみた無人島体験事業の教育効果

本調査では、過年度参加者の現在の意識や考え方を把握するため、国立青少年教育振興機構が行った「子供の体験活動の実態に関する調査研究」（平成 22 年 10 月）（以下、「体験調査」という。）を参考に、過年度参加者の「体験の力」\*を調査した。そして、無人島体験事業の教育効果を検証するため、過年度参加者の「体験の力」を基に、体験調査のデータ（一般の中学 2 年生、高校 2 年生、20 代）との比較や、無人島体験事業の思い出の有無、自然に対する印象の違いと「体験の力」の関係について分析を行った。

#### ① 参加者の「体験の力」の現状と体験調査との比較

一般の青少年に比べ、無人島体験事業の参加者は「体験の力」が高く、特に中学生・高校生の「自尊感情」「共生感」「意欲・関心」「人間関係能力」でその差が顕著にみられた。

過年度参加者の「体験の力」の現状をみると、「自尊感情」が最も高く、次いで「意欲・関心」、「文化的作法・教養」の順となっている（図 2.1.）。

次に、体験調査のデータに合わせ、過年度参加者の「体験の力」を中学生（N=62）、高校生（N=59）、20 代（N=37）に分けて比較したところ、中学生、高校生まではいずれの「体験の力」も一般の青少年より過年度参加者のほうが高く、20 代においても、「規範意識」を除き、過年度参加者のほうが「体験の力」が高いという結果が示された（図 2.2.～図 2.4.）。

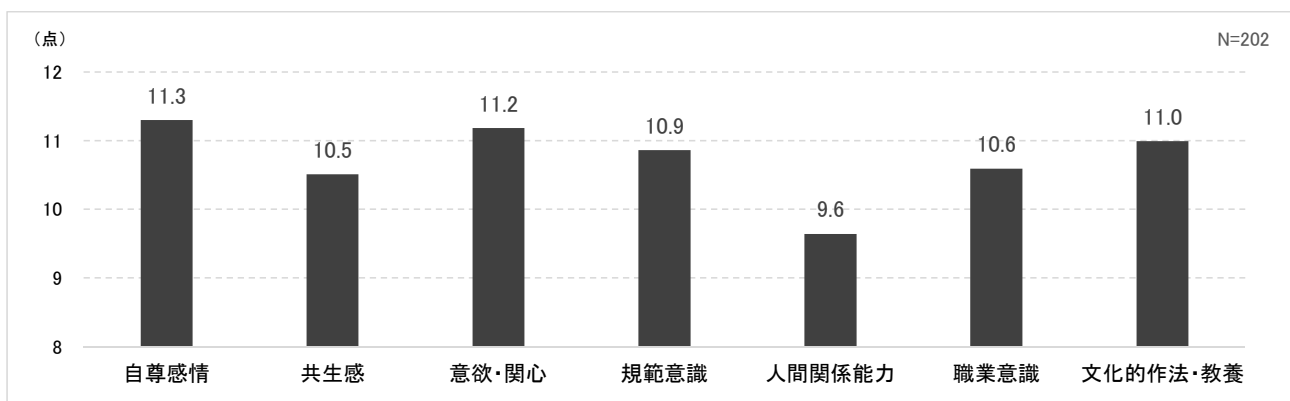
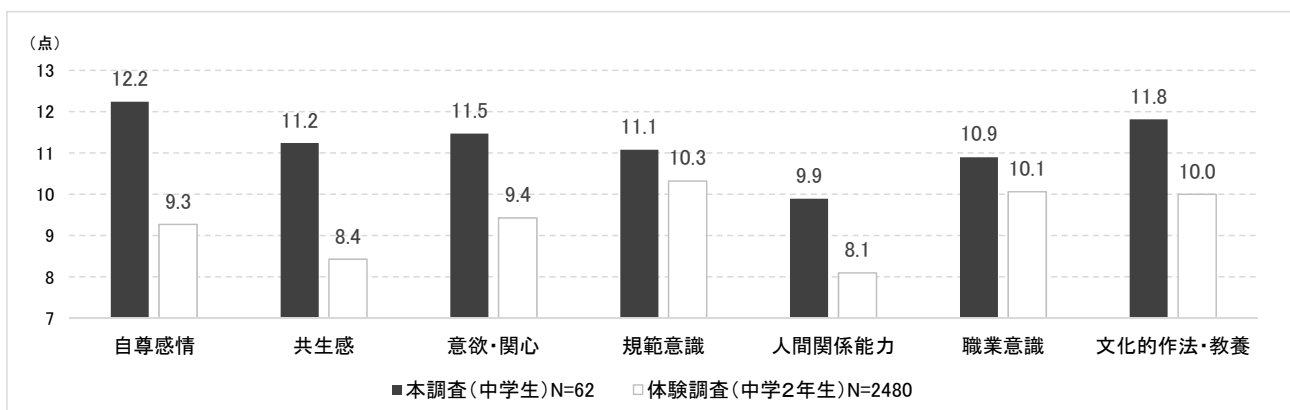
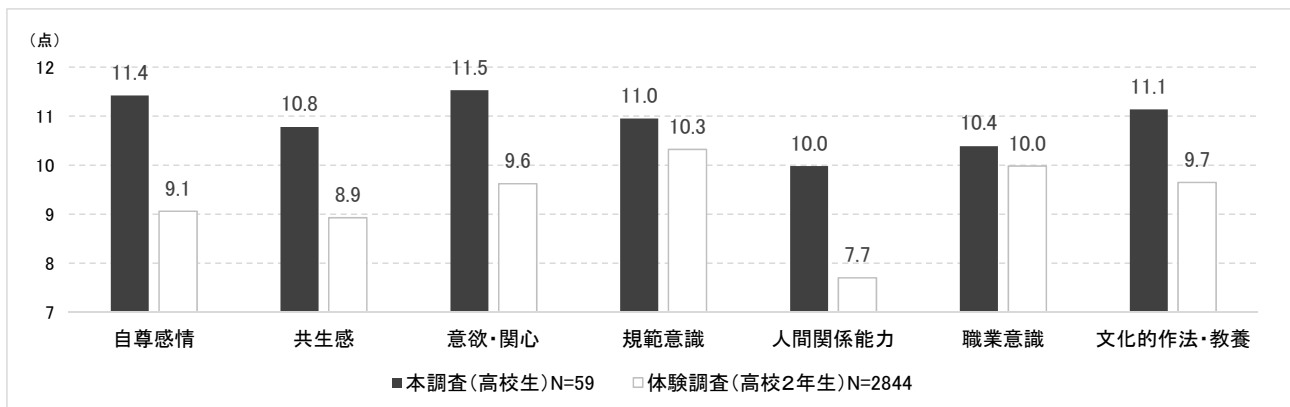


図 2.1. 「体験の力」の現状（参加者調査）



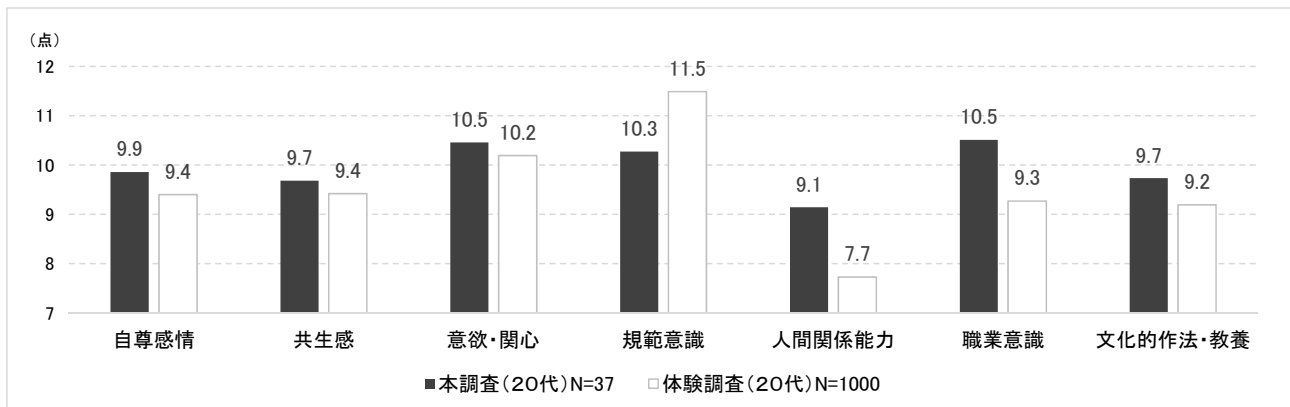
参考:国立青少年教育振興機構「子供の体験活動の実態に関する調査研究」(平成 22 年)

図 2.2. 中学生の「体験の力」の比較（参加者調査）



参考:国立青少年教育振興機構「子供の体験活動の実態に関する調査研究」(平成 22 年)

図 2.3. 高校生の「体験の力」の比較 (参加者調査)



参考:国立青少年教育振興機構「子供の体験活動の実態に関する調査研究」(平成 22 年)

図 2.4. 20代の「体験の力」の比較 (参加者調査)

過年度参加者の「体験の力」と体験調査のデータとの比較で大きな差がみられたものをみると、中学生、高校生では「自尊感情」「共生感」「意欲・関心」「人間関係能力」、20代では「人間関係能力」「職業意識」となっており、年齢によって差がみられる「体験の力」に違いがあることが分かった。また、中学生から高校生、20代と年齢が上がり、無人島体験事業から時間が経つにつれて、「規範意識」を除き、それらの差が縮小する傾向にあることも分かった。

※「体験の力」とは

- ・子供の頃の多様な体験を通して得られる資質・能力を表しており、「自尊感情」「共生感」「意欲・関心」「規範意識」「人間関係能力」「職業意識」「文化的作法・教養」の7つのカテゴリで構成されている。各カテゴリの主な質問項目は以下のとおりである。

【自尊感情】自分のことが好き、家族を大切にできる 等

【共生感】休みの日は自然の中で過ごすことが好き、悲しい体験をした人の話を聞くとつらい 等

【意欲・関心】もっと深く学んでみたい、なんでも最後までやり遂げたい 等

【規範意識】叱るべき時はちゃんと叱れる親が良い、社会のルールは守るべき 等

【人間関係能力】人前でも緊張せずに自己紹介ができる、近所の人に挨拶ができる 等

【職業意識】大人になったら仕事をするべき、社会や人のためになる仕事をしたい 等

【文化的作法・教養】お盆やお彼岸にはお墓参りに行くべき、はしを上手に使うことができる 等

- ・各質問は「とてもあてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の4段階で回答している。各カテゴリの得点は、各質問項目の回答を4~1点に得点化し、カテゴリごとにその得点を合算して算出している。



② 無人島体験事業の思い出や自然に対する印象と「体験の力」の関係

無人島体験事業にたくさんの思い出がある参加者や自然の厳しさを感じた参加者ほど「体験の力」が高くなる傾向が見られ、特に「共生感」でその傾向が顕著にみられた。

無人島体験事業の教育効果を検証する一つの視点として「無人島体験の思い出の有無」や「自然に対する印象の違い」に着目し、「体験の力」との関係について分析した。

「無人島体験事業の思い出の有無」と「体験の力」の関係をみると、思い出が「たくさんある」と答えた過年度参加者ほど「体験の力」が高くなる傾向が見られ、特に「共生感」や「意欲・関心」でその傾向であった（図 2.5.）。また、「自然に対する印象の違い」と「体験の力」の関係をみると、「人間関係能力」を除き、「厳しい日が多かった」と回答した過年度参加者ほど体験の力が高くなる傾向が見られ、特に「共生感」や「規範意識」でその傾向が顕著であった（図 2.6.）。

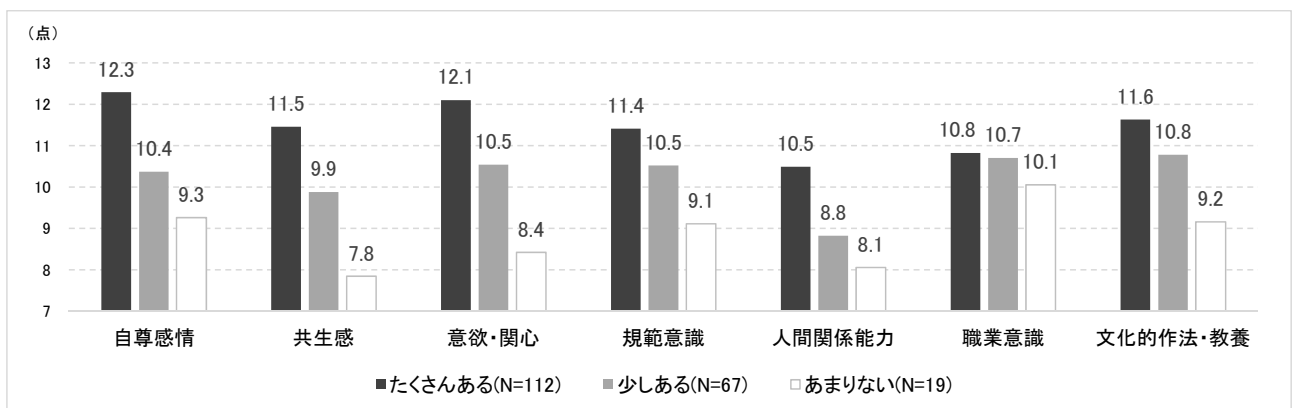


図 2.5. 無人島体験事業の思い出の有無による「体験の力」の差（参加者調査）

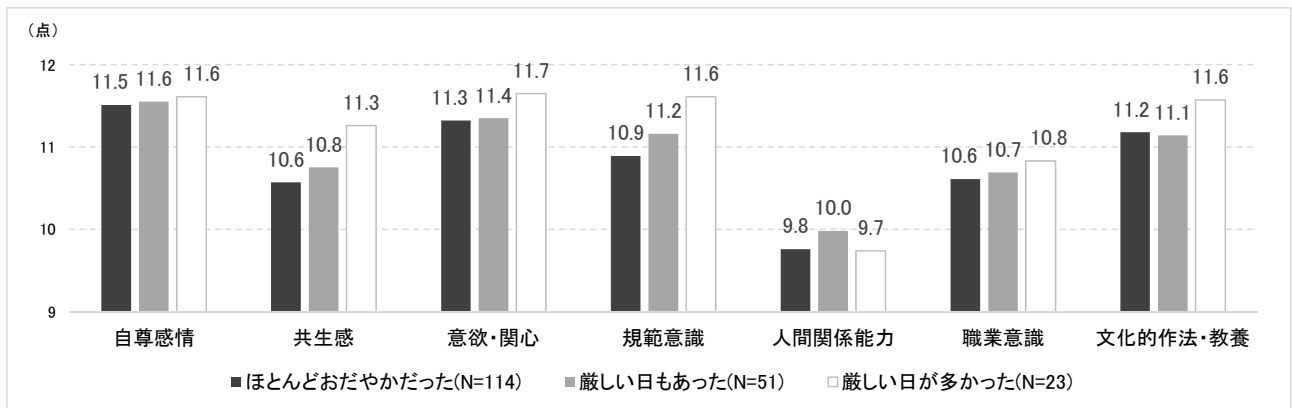


図 2.6. 自然に対する印象の違いによる「体験の力」の差（参加者調査）

## (2) 無人島体験事業後にみられた参加者の変化

無人島体験事業後にみられた参加者の変化としては、「前向きな姿勢が見られるようになった」(スタッフ)、「自信をもつようになった」(保護者)が多い。

スタッフや過年度参加者の保護者に、無人島体験事業後にみられた参加者の変化の有無について尋ねたところ、「変化がみられた」と回答したスタッフは95.8%、保護者は75.7%であった(図2.7.)。そこで、「変化がみられた」と回答した人にどのような変化がみられたか尋ねたところ、スタッフでは「前向きな姿勢が見られるようになった」(60.3%)、保護者では「自信をもつようになった」(53.8%)がそれぞれ最も多い回答となった(図2.8.)。

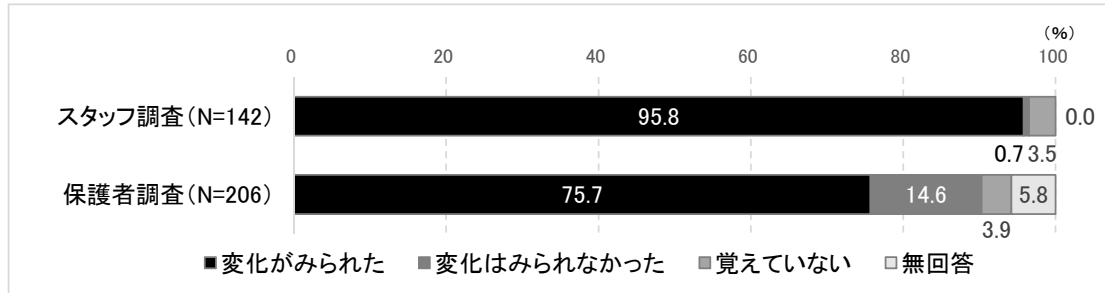


図 2.7. 無人島体験事業後にみられた参加者の変化の有無 (保護者調査・スタッフ調査)

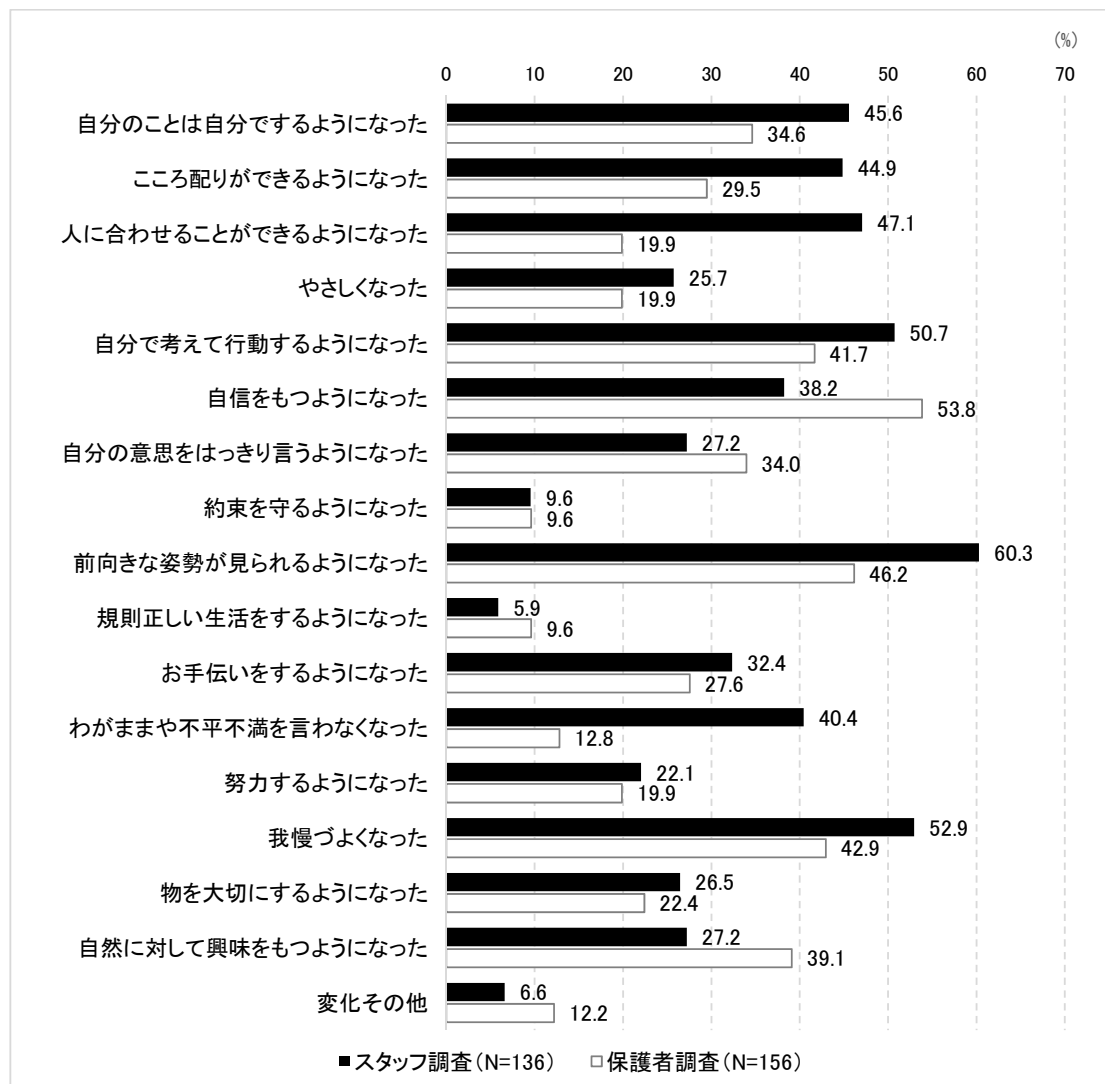


図 2.8. 無人島体験事業後にみられた変化 (保護者調査・スタッフ調査)

(3) 無人島体験事業による今の生活や考え方、進路等への影響

① 今の生活や考え方、進路への影響

無人島体験事業の参加者の7割弱は「今の生活や考え方」に影響を受けていると感じており、参加者の約3割は「進路（進学、就職、将来の夢等）」に影響を受けていると感じている。

過年度参加者に、無人島体験事業が今の生活や考え方、進路（進学、就職、将来の夢等）に影響を与えていると思うか尋ねたところ、今の生活や考え方に影響を与えていると「思う」（「とても思う」＋「少し思う」）と回答した参加者は67.3%で、進路に影響を与えていると「思う」と回答した参加者は31.7%であった（図2.9.）。そこで、「思う」と回答した人に、どのような影響を受けたと思うか尋ねたところ、具体的な影響の内容は表2.1.のとおりであった。

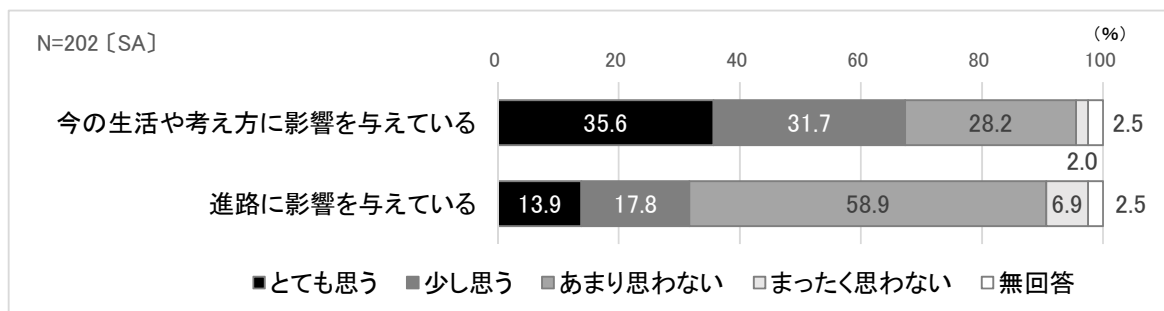


図 2.9. 今の生活や考え方、進路への影響（参加者調査）

表 2.1. 今の生活や考え方、進路への影響の内容（自由記述）

今の生活や考え方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人や自然との関わりにより、人の心は磨かれ豊かになり、それにより得た知識や経験によってキャパシティが広がる。また、メンタルにおいても鍛えられた。どんな環境におかれても自分の力を遺憾なく発揮し相手をより理解し、人間関係を築くことができると自負している。(20歳、女性)</li> <li>・誰かに頼ったりするのではなく、自分からどう行動すればうまくいくのかを考えるようになった。便利なものがたくさんある中で、“ない”生活を経験したことで、協力や団結が深まり、一人一人の得意なことや性格を生かせるようになった。(16歳、女性)</li> <li>・大学でワンダーフォーゲル部に入部して、登山や旅などを行うようになった。狩猟に興味を持ち、狩猟免許を取得した。(23歳、女性)</li> </ul>
進路	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人は環境により、知識や経験を得、それらはその後の人生に大きく影響するという思いから豊かな人間性を育てたいと思い、保育の道へ進み、今、子供たちとの関わりにおいて悩み苦しみつつも、働く保護者に代わって保育に日々奮闘しているところです。(20歳、女性)</li> <li>・来年からアメリカに留学します。どんなことにも挑戦しよう！という気持ちが、このプログラムに参加したことによってつきました。(17歳、女性)</li> <li>・自然や生物がより好きになり、水産系の学校に進学した。食事づくりが楽しかったので、調理師になりたいと思いました。(17歳、男性)</li> </ul>

## ② 無人島体験事業の思い出と今の生活や考え方、進路に与える影響の関係

無人島体験事業の思い出が「たくさんある」と答えた参加者ほど、「今の生活や考え方」「進路」に影響を受けたと感じている参加者が多い。

「無人島体験事業の思い出」と「無人島体験事業が今の生活や考え方、進路に与える影響」の関係について分析したところ、無人島体験事業での思い出が「たくさんある」と回答した過年度参加者ほど、無人島体験事業が今の生活や考え方、進路に影響を与えていると「思う」（「とても思う」＋「少し思う」）と回答する参加者が多くなる傾向がみられた（図 2.10.、図 2.11.）。

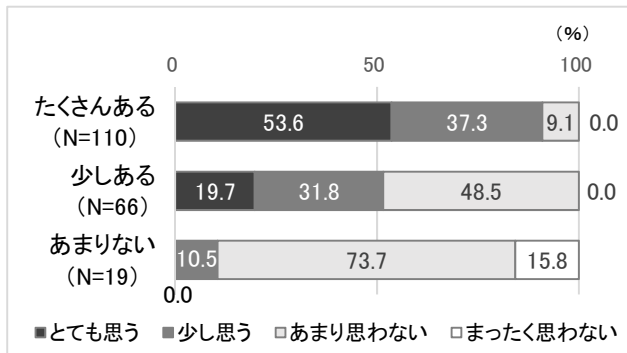


図 2.10. 無人島体験事業の思い出と今の生活や考え方への影響との関係（参加者調査）

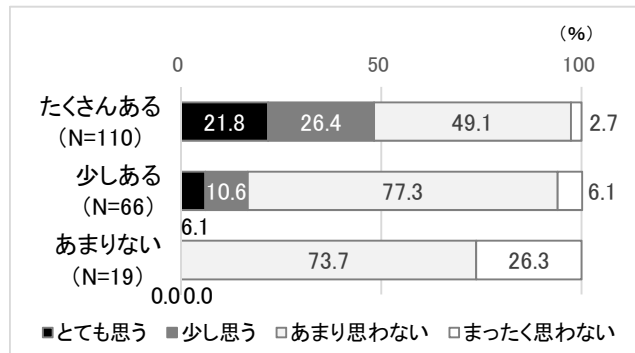


図 2.11. 無人島体験事業の思い出と進路への影響との関係（参加者調査）

## ③ 保護者からみた子供の現在の生活や考え方、進路への影響

7割以上の保護者は、無人島体験事業が子供の現在の生活や考え方、進路に影響を与えていると感じている。

過年度参加者の保護者に、無人島体験事業が子供の現在の生活や考え方、進路等に影響を与えていると思うか尋ねたところ、「思う」（「とても思う」＋「少し思う」）と回答した保護者は73.3%であった（図 2.12.）。そこで、「思う」と回答した人に、どのような影響を受けたと思うか具体的に尋ねたところ、影響を受けた内容は表 2.2.のとおりであった。

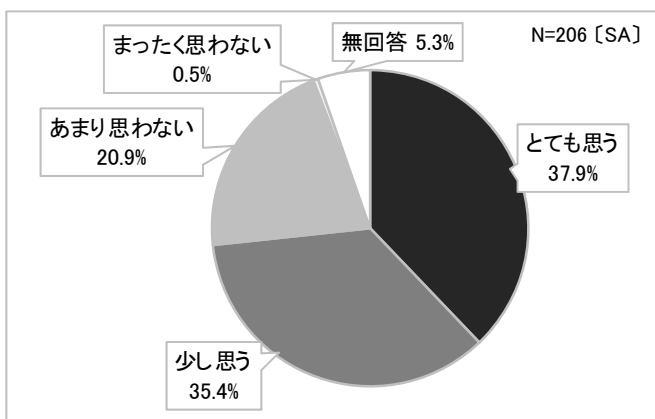


図 2.12. 子供の生活や考え方、進路への影響（保護者調査）

表 2.2. 生活や考え方、進路への影響の内容（自由記述）

- ・無人島で新しい自分を発見できたのか、小学校、中学校でもいじめは続いたが、不登校にならず登校できた。（父）
- ・自分は生き物や自然が好きだということが明確となり、進路は生き物に携わる方面を目指している。現在も水産高校に在学している。（母）
- ・今、看護学校に行っているのですが、参加したことで助けてもらう事、助けてあげる事のありがたさや喜びがわかったので、この進路を選んだのではないかと思います。（母）

#### ④ 無人島体験事業に参加したスタッフへの影響

無人島体験事業が「自分の教育観に影響を与えている」と感じているスタッフは約9割

スタッフに、無人島体験事業が今の生活や考え方、教育観、キャリア形成に影響を与えていると思うか尋ねたところ、今の生活や考え方に影響を与えていると「思う」（「とても思う」＋「少し思う」）と回答したスタッフは85.9%、教育観に影響を与えていると「思う」と回答したのは89.4%、キャリア形成に影響を与えていると「思う」と回答したのは43.7%であった（図2.13.）。そこで、「思う」と回答した人に、どのような影響を受けたと思うか具体的に尋ねたところ、影響を受けた内容は表2.3.のとおりであった。

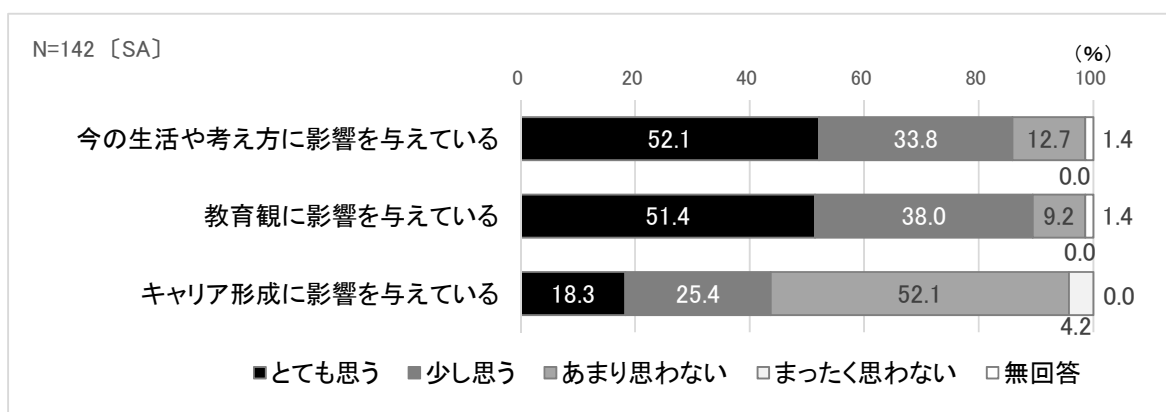


図 2.13. 無人島体験事業に参加したスタッフへの影響（スタッフ調査）

表 2.3. 無人島体験事業に参加したスタッフへの影響の内容（自由記述）

今の生活や考え方	<ul style="list-style-type: none"> <li>頼まれて参加し、行く前は何となく気が重かったが、参加すると楽しかった。その後も、行事で様々な体験活動をする機会があるが、自分が楽しんですることが子供たちのためになると思い、嫌でもすべて参加している。まずはやってみることをモットーにしている。(44歳、女性・養護教諭)</li> <li>すべて子供に考えさせるのではなく、必要なことをきちんと伝えてから自分たちで活動させる。大人がきっかけを作るようにするという考え方をもつようになった。(33歳、女性・教諭)</li> </ul>
教育観	<ul style="list-style-type: none"> <li>子供に達成感や充実感（勝敗や成功・失敗に関わらず）を感じさせることのできるプロセスをどれだけ作り出せるか。授業でも行事でも、そういった視点で自分たち教師が何をすべきか考えるようになった。(45歳、男性・指導主事)</li> <li>子供たちを信じ、待ってみようと思えるようになった。まずは失敗してもいいから、やってみようという姿勢で、いろいろなことにチャレンジしていくことが大切だと考えるようになった。(37歳、女性・養護教諭)</li> </ul>
キャリア形成	<ul style="list-style-type: none"> <li>この事業の事務局をしたことが、物資の手配や業者との折衝、指導者の体調や意欲の観察、イベントをする際の準備や片付け、病気やけが等の緊急時の対応等、教頭職を務めるときに役立っている。(49歳、男性・教頭)</li> <li>社会教育主事の資格を取得し、社会教育の現場で働いてみたいと思うきっかけをくれた事業だったと思う。(48歳、男性・主幹教諭)</li> <li>学校内では研修できない自然体験活動の指導にかかわる経験ができた。(26歳、女性・教諭)</li> </ul>

#### (4) 無人島体験事業での経験や学習したことを生かして取り組んでみたいこと

無人島体験事業での経験や学びを生かして取り組んでみたいことは「教えたり、伝えたりすること」

過年度参加者に、無人島体験事業での経験や学習したことを生かして取り組んでみたいことについて自由記述で尋ねたところ、無人島体験事業で経験したことや学んだことを生かして、人に教えたり、伝えたりすることをしたといった記述が多くみられた(表 2.4.)。

表 2.4. 無人島体験事業での経験や学習したことを生かして取り組んでみたいこと (自由記述)

- ・自然体験を保育に取り入れていきたい。自然に触れる機会を増やすよう努力したい。(20歳、女性)
- ・自然のすばらしさを子供達に伝えるような取組をしたい。(19歳、男性)
- ・学校現場で働く予定なので、児童に生きる力をつけることができる教育をしていきたいと思います。(22歳、女性)
- ・子供(自分より小さな子)と自然で触れ合うプログラムなどに参加し、無人島体験事業で学んだことを教えていきたい。(17歳、女性)
- ・現在の目標は、児童のスポーツ、運動能力向上に関する科学を学びたいと思っている。このような体験が児童にどのような影響があるのかも調べてみたい。(17歳、男性)
- ・どんなことがあっても前向きに取り組む、海外など知らないところに行ったり、さまざまなことにチャレンジしてみたい。(12歳、女性)
- ・今の経験を活かしてもう一度無人島にチャレンジしたい。(20歳、男性)

### 3. 最近の生活の様子

#### (1) 過去1年間の体験活動の実施状況

一般の青少年に比べ、無人島体験事業の参加者のほうが「体験活動」を何度もしている割合が高く、特に「放課後や休日に行う遊びやスポーツ」、「地域行事（スポーツ大会、文化祭等）への参加」でその差が顕著であった。

過年度参加者に、過去1年間の体験活動（スポーツ、お手伝い、ボランティア、地域行事）の実施状況を尋ねたところ、「何度もした」の回答が多かった活動は「放課後や休日に体を動かす遊びやスポーツをすること」（60.9%）で、次いで「食事の支度、買い物、掃除などのお手伝いをすること」（47.0%）「地域のスポーツ大会や文化祭などの行事に参加すること」（36.6%）等であった（図3.1.）。

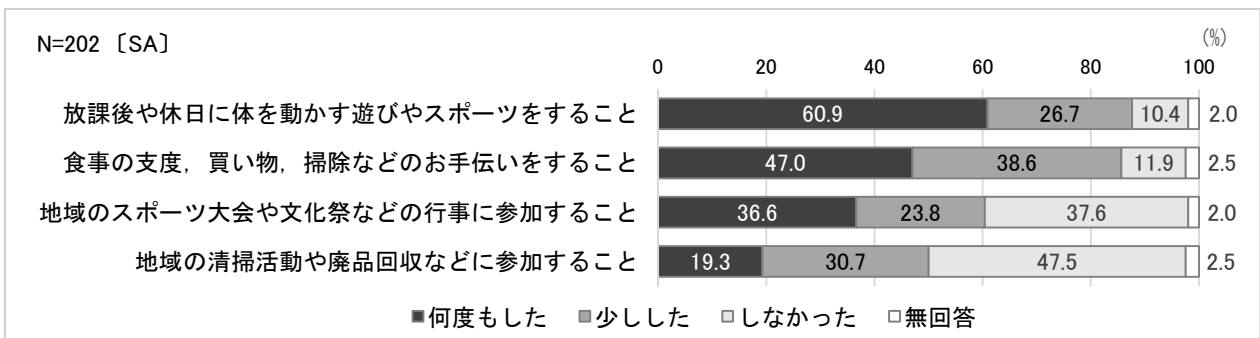
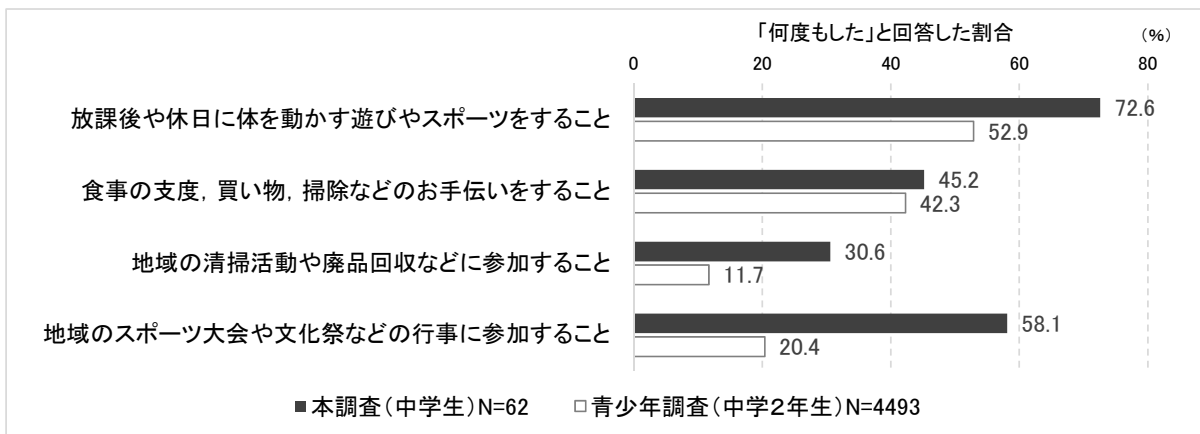


図 3.1. 過去1年間の体験活動の実施状況（参加者調査）

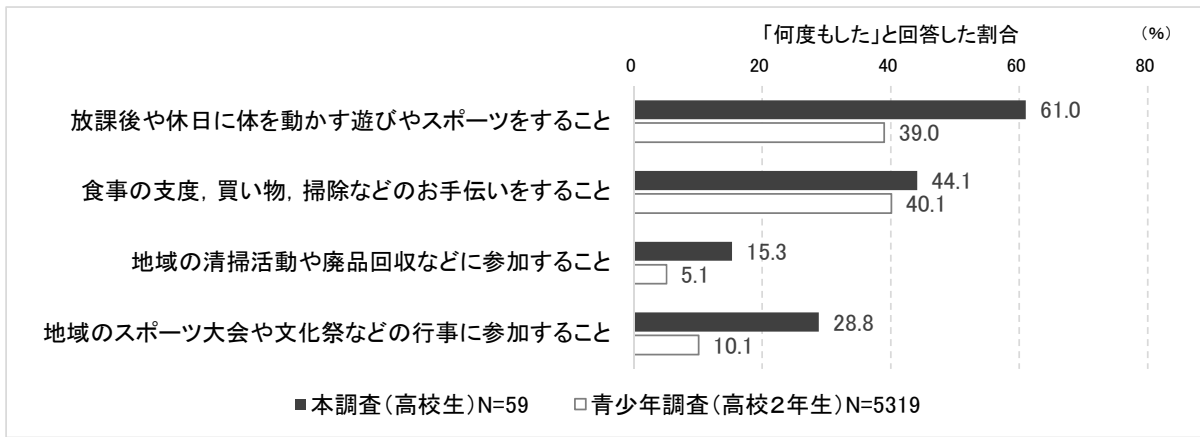
次に、無人島体験事業後の生活の様子として、過年度参加者と一般の青少年で体験活動の実施状況に差があるか検証するため、国立青少年教育振興機構が行った「青少年の体験活動等に関する実態調査（平成26年度調査）」（以下、「青少年調査」という。）の中学2年生、高校2年生のデータを基に比較を行った。

その結果、中学生、高校生ともに、過年度参加者のほうがいずれの体験活動でも「何度もした」と回答した割合が高くなっており、特に「放課後や休日に体を動かす遊びやスポーツをすること」「地域のスポーツ大会や文化祭などの行事に参加すること」でその差が顕著であった（図3.2.、図3.3.）。



参考: 国立青少年教育振興機構「青少年の体験活動等に関する実態調査(平成26年度調査)」(平成28年)

図 3.2. 中学生の過去1年間の体験活動の実施状況の比較（参加者調査）



参考: 国立青少年教育振興機構「青少年の体験活動等に関する実態調査(平成26年度調査)」(平成28年)

図 3.3. 高校生の過去1年間の体験活動の実施状況の比較 (参加者調査)

## (2) 現在の生活に対する満足感

一般の青少年に比べ、無人島体験事業の参加者のほうが現在の生活に対して「とても満足」している割合が高く、特に「自分自身」や「学業の成績」に対する満足感でその差が顕著であった。

過年度参加者に、現在の生活に対する満足感を尋ねたところ、「とても満足」の回答が多かったのは「友人関係」(85.2%)で、次いで「余暇生活」(79.7%)「学校生活・職場生活」(77.2%)等となっていた(図3.4.)。

次に、過年度参加者と一般の青少年で現在の生活に対する満足感に差があるか検証するため、国立青少年教育振興機構が行った「高校生の生活と意識に関する調査 - 日本・米国・中国・韓国の比較 -」のデータを基に比較したところ、現在の生活に対して「とても満足」と回答した割合は、「余暇生活」を除き、過年度参加者のほうが高くなっており、特に「自分自身」や「学業の成績」に対する満足感でその差が顕著であった(図3.5.)。

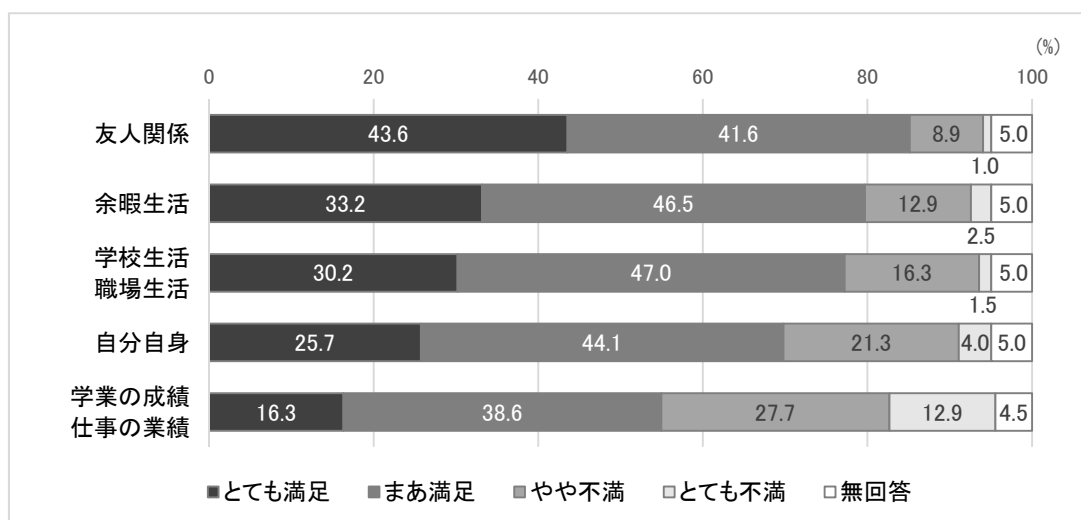
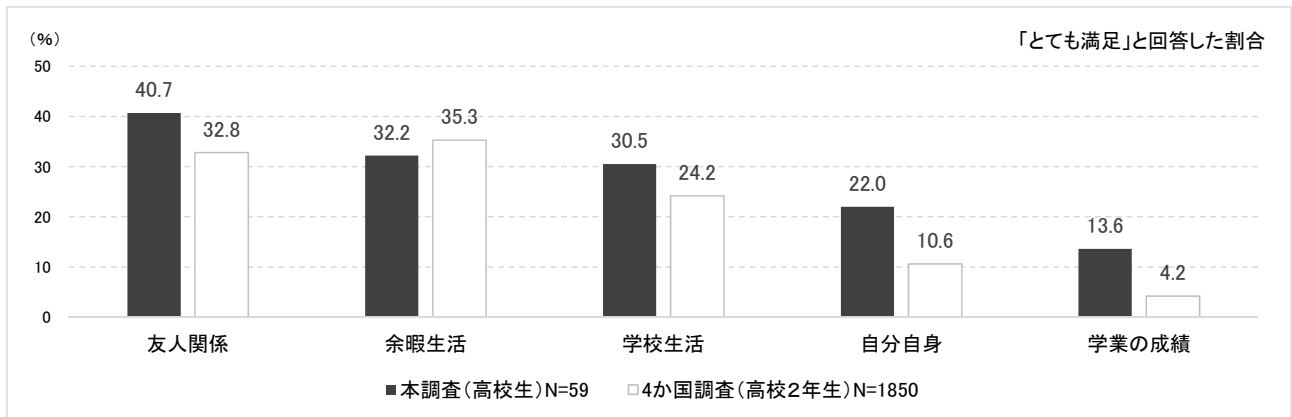


図 3.4. 現在の生活に対する満足感 (参加者調査)





参考: 国立青少年教育振興機構「高校生の生活と意識に関する調査-日本・米国・中国・韓国の比較-」(平成 27 年)

図 3.5. 高校生の現在の生活に対する満足感の比較 (参加者調査)

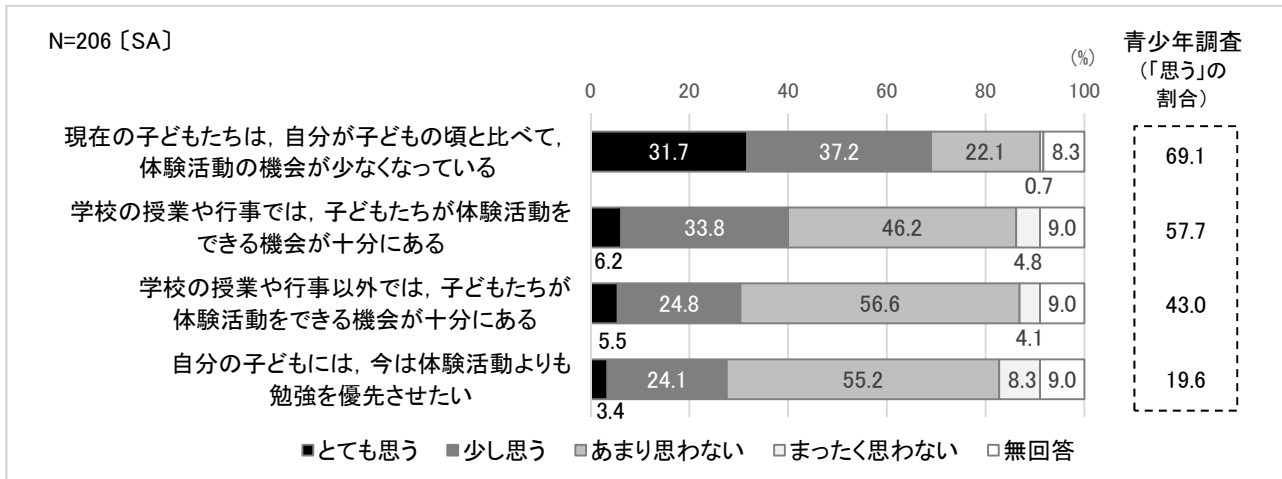
#### 4. 保護者の子育てや教育に対する考え

##### (1) 子供の体験活動の現状に対する保護者の意識

7 割弱の保護者は「自分の子供の頃に比べ、今の子供たちは体験活動の機会が少なくなっている」と思っており、特に無人島体験事業の参加者の保護者は、一般の保護者に比べ、「体験活動ができる機会が十分にある」と思っている人が少ない。

年齢が 12～18 歳までの過年度参加者の保護者に、子供の体験活動の現状に対する考えについて尋ねたところ、「思う」（「とても思う」＋「少し思う」）の回答が多かったのは「現在の子供たちは、自分が子供の頃と比べて、体験活動の機会が少なくなっている」（68.9%）で、次いで「学校の授業や行事では、子供たちが体験活動ができる機会が十分にある」（40.0%）、「学校の授業や行事以外では、子供たちが体験活動ができる機会が十分にある」（30.3%）等であった（図 4.1.）。

次に、国立青少年教育振興機構が行った青少年調査の保護者データを基に、過年度参加者の保護者と一般の保護者で子供の体験活動の現状に対する考えを比較したところ、過年度参加者の保護者は、一般の保護者に比べ、「学校の授業や行事では、子供たちが体験活動ができる機会が十分にある」「学校の授業や行事以外では、子供たちが体験活動ができる機会が十分にある」と「思う」割合が 10 ポイント以上低くなっていることから、子供たちが体験活動ができる機会が十分でないと感じている保護者が多いことが分かった。



参考: 国立青少年教育振興機構「青少年の体験活動等に関する実態調査(平成 26 年度調査)」(平成 28 年)

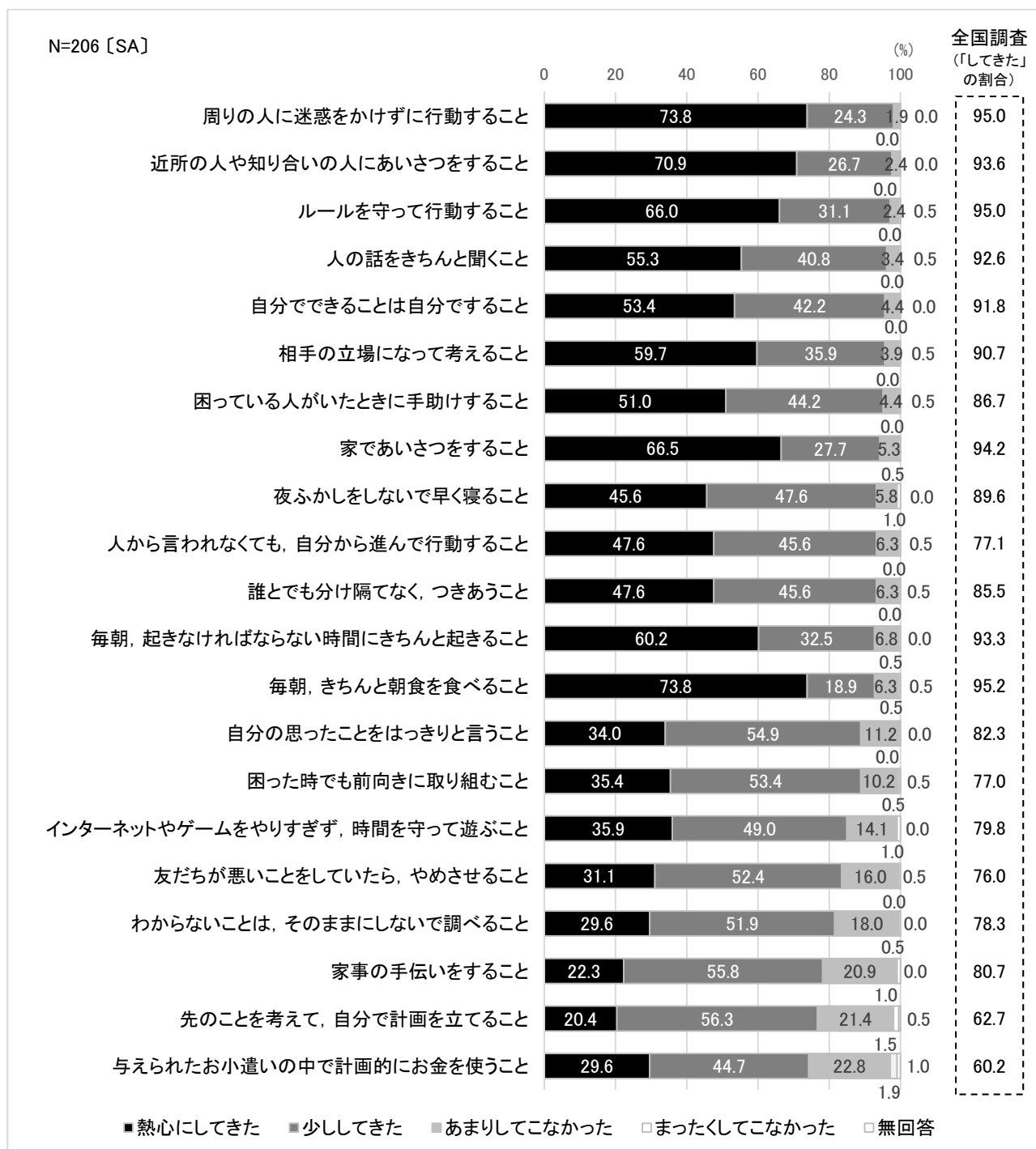
図 4.1. 子供の体験活動の現状に対する保護者の意識（保護者調査）

##### (2) 子供のしつけ

無人島体験事業の参加者の保護者は、一般の保護者に比べ、自分の子供に「自ら進んで行動すること」や「お小遣いの中で計画的にお金を使うこと」「先を考え、自分で計画を立てること」「困った時でも前向きに取り組むこと」を身につけさせようとしてきた人が多い。

過年度参加者の保護者に、子供を育てる上でどのような行動や生活習慣を身につけさせようとしてきたか尋ねたところ、「してきた」（「熱心にしてきた」＋「少ししてきた」）の回答が多かったのは「周りの人に迷惑をかけずに行動すること」（98.1%）で、次いで「近所の人や知り合いの人にあいさつをすること」（97.6%）、「ルールを守って行動すること」（97.1%）等であった（図 4.2.）。

次に、国立青少年教育振興機構が行った青少年調査の保護者データを基に、過年度参加者の保護者と一般の保護者で子供のしつけに対する考えを比較したところ、過年度参加者の保護者は、一般の保護者に比べ、「人から言われなくても、自分から進んで行動すること」「与えられたお小遣いの中で計画的にお金を使うこと」「先のことを考えて、自分で計画を立てること」「困った時でも前向きに取り組むこと」について「してきた」と回答した割合が10ポイント以上高くなっていた。



参考:国立青少年教育振興機構「青少年の体験活動等に関する実態調査(平成26年度調査)」(平成28年)

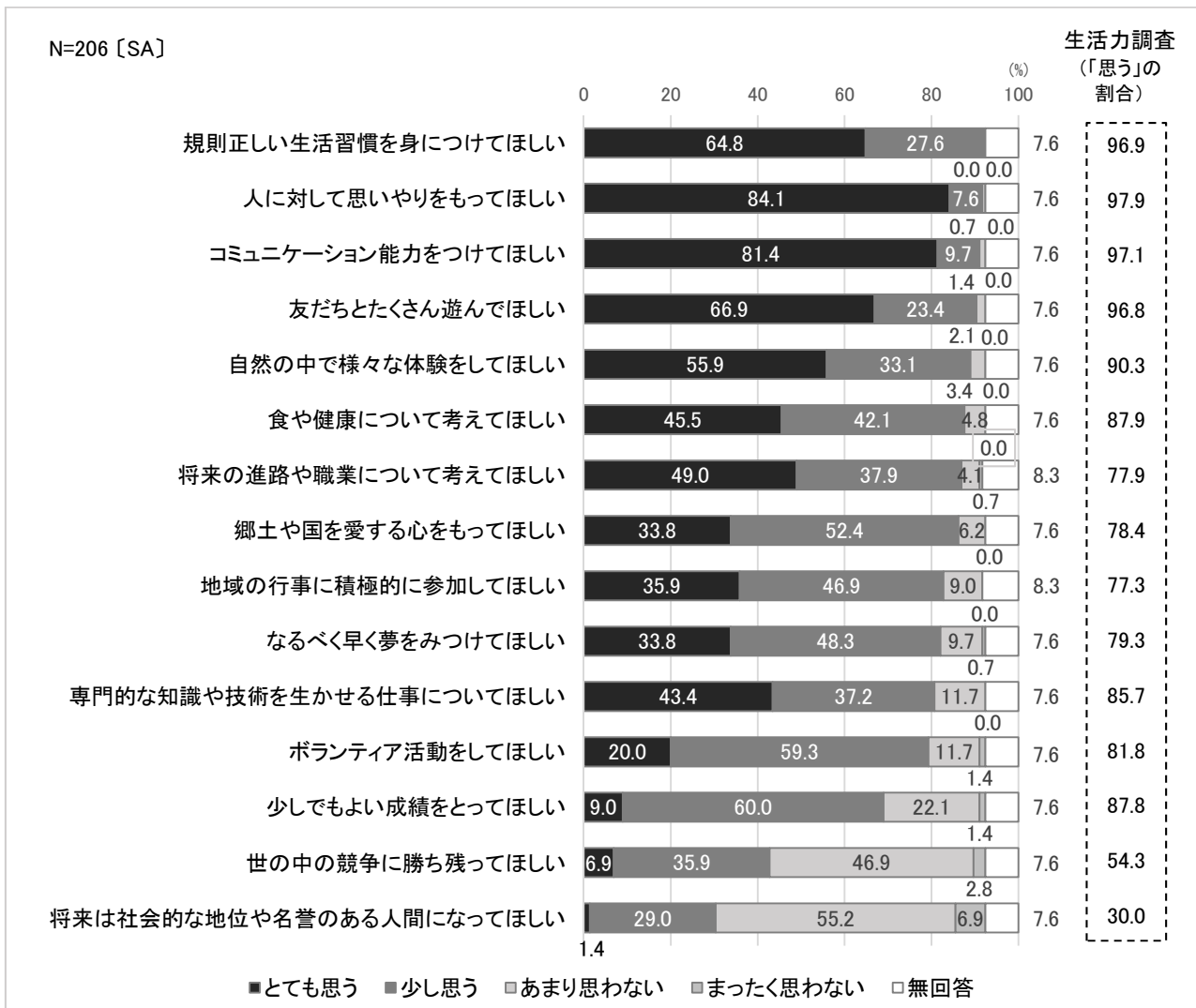
図4.2. 子供に身につけてほしいことややってほしいこと (保護者調査)

(3) 子供に身につけてほしいことや、やってほしいこと

無人島体験事業の参加者の保護者は、一般の保護者に比べ、自分の子供に「将来の進路や職業について考えてほしい」「郷土や国を愛する心をもってほしい」と思う人が多く、一方で「少しでもよい成績をとってほしい」「世の中の競争に勝ち残ってほしい」と思う人は少ない。

年齢が12～18歳までの過年度参加者の保護者に、子供に身につけてほしいことや、やってほしいこと等について尋ねたところ、「思う」（「とても思う」＋「少し思う」）の回答が多かったのは「規則正しい生活習慣を身につけてほしい」（92.4％）で、次いで「人に対して思いやりをもってほしい」（91.7％）、「コミュニケーション能力をつけてほしい」（91.1％）等であった（図4.3.）。

次に、国立青少年教育振興機構が行った「子供の生活力に関する調査研究」の保護者データを基に、過年度参加者の保護者と一般の保護者で子供に身につけてほしいことややってほしいことを比較したところ、過年度参加者の保護者は、一般の保護者に比べ、「将来の進路や職業について考えてほしい」「郷土や国を愛する心をもってほしい」と思っている割合が高く、一方で「少しでもよい成績をとってほしい」「世の中の競争に勝ち残ってほしい」と思っている割合が低かった。



参考: 国立青少年教育振興機構「子供の生活力に関する調査研究」(平成27年)

図4.3. 子供に身につけてほしいことや、やってほしいこと（保護者調査）